

固有名の指示理論—エヴァンズの解釈と応用—

森永 豊

1. はじめに

固有名による指示のメカニズムをガレス・エヴァンズ (Gareth Evans) が論じる際に、彼がその核心と位置付けた洞察は次のものである。固有名の個別の使用は、異なる機会に繰り返しその固有名が使用され、また話者から話者へと伝播してゆく言語実践 (practice) の一部として成立している。発話における固有名の指示とは、その場限りで成立することではなく、その固有名を用いる集団的な言語実践(「固有名使用実践 (name-using practice)」)の一部として成立する。

本稿では、この洞察を軸にして、固有名による指示のあり方にエヴァンズがどう迫ったのかを明らかにしたい。全体の流れを確認すると、第2節において Evans(1982)に見られるエヴァンズの基本的なアイデアを確認し、第3節では、最近出されたイモージェン・ディッキー (Imogen Dickie) によるエヴァンズの解釈と、この解釈に基づいたエヴァンズへの批判を紹介する。第4～6節では、この解釈を批判的に検討しながら、私の解釈を試みる。第7節では、私の代替的解釈に基づいて、固有名を使う集団的営為への参加に失敗しうる誤りを3つ考察し、これを通してエヴァンズの提示した描像がもつ可能性と理論的課題を明らかにしたい。

2. 生産者と消費者

集団的な言語実践の中で固有名を使った個々の発話を捉えるという洞察は、ある重要な意味でドネランやクリプキに由来する。ごく簡単に議論の歴史を振り返っておくと、彼等によれば固有名の記述説と呼ばれる立場は、固有名によ

る指示を正しく説明しない。記述説論者は概ね次のような主張をする。話者が固有名「 α 」で対象を指示するのは、話者が「 α 」の指示対象を同定する記述を持ち、かつ、その記述を満たす（あるいは、選言肢で結ばれた記述の東の大半を満たす）対象が唯一存在するとき、そしてそのときのみである。しかしクリプキによれば、これは必要でも十分でもない。そこで記述説に替えて、クリプキは以下を必要条件とする因果的描像を提示した。すなわち、話者が固有名で対象を指示するのは、話者による「 α 」の使用が別の話者の「 α 」の使用に由来し、かつ、この由来をさらにさかのぼると、指示対象を「 α 」と命名する行為（命名儀式）まで辿ることができ、かつ、先行する話者が「 α 」で指示したのと同じ対象を指示する意図をもって話者が「 α 」を使用するときに限る¹。エヴァンズは以上の主張をおおむね支持しつつも、固有名による指示の成立を説明する上で記述的要素の役割を不可欠と考える。彼は因果的描像を引き受けながらも、記述的要素をすっかり排除してしまうことに満足しない。そのため、因果的描像に記述的要素を組み込むことで、固有名の指示を正しく説明する理論を提示しようとする。しかし、対象を同定するという記述説論者が思い描いた役割以外に、記述がいったいどんな役割を果たすというのだろうか。

次節以降で、エヴァンズが与えた理論の詳細に立ち入るが、本節では、エヴァンズの説明において基本的な枠組みとなる用語を先に導入しておこう。一般に固有名の使用が伝播してゆく順序は、固有名の指示対象と見知りのある人々から、見知りのない人々へ、というものである。そこでエヴァンズは、固有名を使用する集団を二つに分ける。ある固有名の「生産者 (producers)」と呼ばれる人々は、その固有名の指示対象を知覚し、また再認することができる。さらに彼らは、もしその指示対象が人物であれば、その人とさまざまな言語行為を行う機会がある。これ以外の人々は「消費者 (consumers)」と呼ばれる。エヴァンズが「消費者」と命名するのは、「彼らが総じて言語実践のなかへ新しい情報を注入することができず、生産者が行う情報収集のやりとりに依存しなければならないからである。(Evans, 1982:377)」言語をある程度習得した者であれば、いくつかの同時代の対象に関して、それらを指示する固有名の生産者

グループの一員になっていると期待される。通常、話者はさまざまな固有名使用実践の生産者であると同時に、消費者でもある。私は友人の固有名「マサカズ」や飼い犬の「ハナコ」の生産者である一方、「坂本竜馬」や友人から話で聞いたことしかない「カズキ」については消費者でしかない。また、生産者であるために命名者である必要はない。私は「マサカズ」の生産者ではあるが、友人の名付け親ではない。

生産者・消費者の対を用いてエヴァンズが明らかにしようとしていることは以下で詳しく述べる。いま確認しておきたいのは、生産者が固有名の指示対象に対して持つ関係と、消費者がその対象に対して持つ関係の違いである。両者の定義より導かれることとして、生産者は固有名の指示対象に関して何が真実であるかを決定できる立場にいますが、消費者はこの立場にいない。生産者と消費者の間には、固有名の指示対象に関わる命題の真理性を決定できるかどうかという点で違いがある²。

3. ディッキーの解釈と批判

エヴァンズが、固有名使用実践の参加者として生産者・消費者の対を導入することの眼目は何だろうか。それは、クリプキやドネランの因果・歴史的描像が固有名の集団的な言語実践について正確に捉えなかったある側面を、彼の理論に正しく反映させることである。エヴァンズは、命名儀式を行うだけでその固有名「 α 」を使用する言語実践が始まるとは考えない。そもそも、命名儀式のように固有名使用実践が明確な開始を持つと考える必要もない。固有名使用実践にとって肝心なことは、「 α 」を使い続けるある程度の数の生産者が存在することである。「 α 」の命名儀式を行った後にその指示対象を見知っている人々の間で「 α 」が使用されるようになって、「 α 」の固有名使用実践はいつしか始まっている。固有名使用実践が一人では始められないという観察は、固有名使用実践が集団的ないし社会的であることをより強く印象づける。そしてこの観察をよく反映する見方を与えるのは、言語実践の参加者を生産者・消費

者グループという集団で区切る方であって、命名者、及びその人物と因果的に結びついた話者のように捉える方ではない。

ここまでの論述から、われわれは、エヴァンズが目指す理論の基本的な図式を手にすることができる。それは、生産者と同じ固有名使用実践に参加するのであれば、消費者は、生産者と同じ対象を指示していることになるということである。この図式の下でエヴァンズは、生産者から消費者へと固有名使用実践が伝播する仕組みを解明する課題を背負う。現在では、この仕組みに関して彼がどのように考えたかが大筋で明らかになっている。ところが、その理論の具体的な定式化と射程に関するところでは、私が他の論者に同意できない点がある。ごく最近、ディッキーがエヴァンズを解釈し、その上で彼への批判も提起している³。以下では彼女の解釈と批判を検討しながら、エヴァンズの議論が導く主張に迫ることにする。

ディッキーは、Evans(1985a)とEvans(1982)を吟味し、エヴァンズが出しうる最も有望な理論とされるものを提示した。ディッキーはEvans(1982)における一節を引きつつ⁴、これにEvans(1985a)で提起された「あてはまりの程度 (degree of fit)」という論点を補う形で、エヴァンズの見解をまとめた。用語の説明や論点の補足は直後に行うが、まず以下にこれを引用する。

核となるグループのメンバー [生産者] の幾人かが開始した、 α を指示するための固有名「 α 」の言語実践に私が [消費者として] 参加していると言えるのは以下のとき、そしてそのときのみである。

(D1) 核となるグループのメンバーが「 α は F である」と表現する、ないしは表現したであろう信念に大半の情報が由来する「 α 」ファイルを、私は所有している。かつ、

(D2) 私の「 α 」ファイルに含まれる、対象の種類に関わるいかなる情報にも α はあてはまる (あるいは、ほぼあてはまる)。 (Dickie, 2011: 10) ([]内は引用者の挿入)

「 e 」は、「 α 」の指示対象である（下線はディッキーの記号法において、対象を名から区別するための記号である）。「情報」とは、物理的な過程において伝達され、蓄えられる非概念的内容を表す概念である。「由来する」とは、主体がもつ情報が別の話者から因果的に伝達されることである。概念的内容を表示する信念は情報から区別される。ここで「信念」とは、その主体がある種の情報を所有することによって持つことになる判断への傾向性と考えてよい。つまり、主体がある種の情報に基づいて p と判断するならば、 p を命題内容とする信念をその話者がもつということである⁵。「 α 」ファイル」とは、「 α 」に関して主体が持つ信念群のことであると考えればよい。以上を踏まえたうえで、(D1) は生産者と消費者の因果的なつながりを表現している。そのポイントは、消費者が「 α 」に関して持つ信念の大半が、生産者の持つ「 α 」ファイルに由来するものでなくてはならないというところにある。(D2) が消費者に課すのは、指示対象の種類に関する消費者の信念について、たとえば人間の性別を取り違える程度の誤りは許されるだろうが、極端に実際からかけ離れた信念を持つてはならないということである。(D2) は、エヴァンズが Evans(1985a) で提示した「当てはまりの程度⁶」という論点に対応している。この論点をここで説明しておく。たとえば「男性」「女性」「犬」「土地」という種名の列に対して、左端の「男性」を起点にして右に進むにつれ、「男性」との類似性が下がっていく。エヴァンズの例によると、「アニール」はアーサー王の墓所がある土地の名前であると同時に、アーサー王の息子の名前でもある。因果的描像を理論へと改良する際に排除したいのは、「アニール」は土地の名前であると記述するような人々がまさにその「アニール」で息子の方を指示するという事態である。しかし因果的な条件 (D1) だけでは、このような事態を排除できない。当てはまりの程度とは、類似性の高さに対して許容できる水準を設定することによって、こうした事態を取り除こうという制約である。(D2) はこの制約を条文化したものである。

本稿の考察にとって必要なことは以上で述べた。そこで次に、この理論に対する彼女の批判を見てみよう。ディッキーによれば、上の理論にはエヴァン

ズが想定しなかったとされる反例がある。彼女が提示した例を見よう⁷。14世紀に生きたジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer) は、彼が生きた時代によく知られた詩人だったが、死後数世紀経ってから、その人生に関する大幅な脚色・改変だけでなく、想像上の著作の帰属などが行われた。この結果としてその後の数世紀間、チョーサーの専門家と呼ばれる人でさえ、生産者による「チョーサー」の言語実践に由来しない情報がその大半を占める「チョーサー」ファイルを持つことになった。この状況は、上の理論の (D1) を満たさない。よって、創作的事実の帰属から数世紀の間、人々は「チョーサー」の生産者と同じ人物を指示してこの名を用いていなかったことになる。しかしわれわれは、その間を生きた人々が生産者と同じ人物を指示できなかったと考えないのではないだろうか。よって、(D1) は参加の理論に必要なものである。エヴァンズは、われわれの直観をすくい取る正しい理論を与え損ねている⁸。

4. 参加の意図を表明すること

本節で私は、(D2) をエヴァンズの議論から取り出すことが Evans(1982) の論述と整合しないことを示し、同時に、(D1) に関わるディッキーの解釈と批判を検討するために必要となる論点も準備する。

固有名を使って指示を行うための生産者と消費者に共通する必要条件として、エヴァンズは次を挙げている。

- (M1) 「固有名を使って何かを指示しようとするとき、話者は[・][・]どの固有名の言語実践に参加しようとするか(なおかつ、[・][・]どの言語実践に参加しているか)人から受け取られようと)意図しているかを表明しなければならない。
(Evans, 1982: 384)」

主にこの要求は、「タクヤ」や「アヤ」などが複数の人に適用されるという事実が示すとおり、異なる対象に関わる複数の言語実践で同音の固有名が使用

されることからもたらされる。エヴァンズによれば、「アヤ」を使った発話で話者が特定の対象を指示するためには、共同体で行われている複数の固有名使用実践の内から、一つを特定する必要がある。そして、そのいずれかに参加する意図を表明するには、「アヤ」の指示対象を特定するために人々が共有する記述「かくかくであるような女性 (the ϕ)」にこそ訴える必要がある⁹。クリプキやドネランの批判によって記述は固有名の指示に関わる役割を一切持たないことが示されたかに見えたが、エヴァンズはここにその役割を再び見出す。とはいえ、彼が記述に与えた役割は、記述説が与えたものとは異なる。記述が特定するのは対象ではなく、あくまでも生産者が集団で開始した固有名使用実践の方である。重要な論点なので詳しく述べよう。

記述が生産者の行う固有名使用実践を特定するために利用されると考えるべきなのは、人々に共有された「the ϕ 」が「 α 」の指示対象を指示しない可能性があるからである。この可能性を理解するには、ただ次の想像をすればよい。「 α 」についての無根拠な噂が共同体中を駆け巡った結果、そうした情報で「 α 」が特定される場合である。しかし、たとえ「the ϕ 」がどの人物も指示していないときでも、それは「ある特定の人物についての噂や申し立て (Evans, 1982:385) (傍点は著者)」であろう¹⁰。つまり、噂の内容がどれほど対象の実像とかけ離れていても、噂がその対象についてのものであることに変わりがないのである。固有名を使った指示は、事実でも個人の理解でもなく、むしろ人々が営む会話の場で通用している記述内容を利用して為される。記述を与えることによって肝心なことは、話者が「 α 」の指示対象について持っている正しい信念を述べるのではなく、「 α 」について人々が何を口にしていくかを特定することなのである。

以上から前節の (D2) が、Evans(1982) における立場と一貫しないことが分かる¹¹。「 α 」の言語実践への参加を表明することによって、消費者が「 α 」の指示対象について正しい信念を持っているかどうかは問題にならない。したがって、固有名の指示対象がどのような種類であるかについて、消費者がどの程度正確な信念を持っているかという論点は問題にならないのである。とはいえ、エ

ヴァンズを解釈する作業を終えた後で、われわれはこの論点に再び返ってくることになる。第7節で私は、指示対象の種類に関する話者の信念が固有名を使った指示の成否を左右する点をふたたび問題にする。

5. チョーサーの事例

本節ではまず、(D1)に前節の議論を踏まえた修正を加える。次いで、ディッキーの考えに従えばチョーサーの事例が修正後の条件に対してもやはり反例となることを確認する。しかし、その後でこの反例を支える直観を覆し、ディッキーの批判から根拠を奪うことを試みる。

ディッキーが解釈するエヴァンズの理論がチョーサーの事例を反例にもつのは、(D1)の「大半が(生産者の情報に由来する)」という項目による。以下では、この項目を解釈上の論点にしたい。この項目と関係があるのは、指示対象の固定に関わるエヴァンズの主張である。すなわち、話者が名によって指示する対象とは、その名に関する情報全体にとっての優勢な(dominant)情報源である¹²。固有名の指示は、その名に関わる優勢な情報源である対象に固定される。このことを固有名の指示対象が取り違えられる場合を使って説明したい。「アヤ」という娘には極めて似た姿の母がおり、時々ふたりで申し合わせをして、母がアヤ本人のふりをして人前に現れることがあるとする。この結果、「アヤ」の言語実践に結びついた情報を供給する対象がアヤ本人と母のふたりいることになる。「アヤ」がアヤ本人か母のどちらを指示するかは、優勢な情報源がどちらであるかという点から決まる。母が「アヤ」を名乗る場合がそれほど頻繁でなければ、「アヤ」の指示はアヤ本人に固定されたままである。次に母が娘を監禁して、常に「アヤ」を名乗るようになり、人々がそのことに気付かないとする。しばらくすると「アヤ」の言語実践への情報の供給量がアヤ本人と母の間で拮抗するようになる。このとき、「アヤ」の言語実践は優勢な情報源を持たなくなり、指示がどの対象にも固定されない時期に入る。やがてさらに時が過ぎて、今度は母が優勢な情報源になると、「アヤ」の指示は母に固定され

ることになる。この時期になって人々が隠された事実気づいたときには、「この女はアヤではない」という表現で母を指弾することができない。というのも、「アヤ」の言語実践の歴史における大半の場面で人々が母を指示してきた結果、「この女」と指差された女がまさに「アヤ」で指示される対象だからである。

第3節で述べたが、消費者が「 α 」の言語実践に参加するとき、生産者が「 α 」の指示を固定したのと同じ対象を消費者も指示していることになる¹³。したがって、消費者が「 α 」の言語実践に参加する際に利用する情報について、その因果経路をさかのぼれば「 α 」の情報を主に供給した対象に行きつく。このとき、消費者は名の言語実践に新しい情報を注入する立場にいないわけだから、情報源として頼るのは生産者が「 α 」の指示対象について言っていること（書いていること）のほかはない。したがって、もしも「 α 」の生産者以外からの情報が過剰に供給されたとすると、消費者の利用する情報について、「 α 」の情報を主に供給した対象まで辿ることができない。こうした理由から、(D1)「核となるグループのメンバーが「 α はFである」と表現する、ないしは表現したであろう信念に大半の情報が由来する「 α 」ファイルを、私は所有している」は解釈として基本的に正しいと考えられる。ただし、前節の議論に従えば、エヴァンズの因果的条件を消費者の信念に関わる要求とすることは正しくない。そこで、(D1)はこう書き換えられる。

- (M2) 生産者と同じ固有名の言語実践に参加するとき、参加を表明する際に利用する記述の大半が生産者に由来する情報に基づいていなければならない。（因果性条件）

ディッキーの考えでは、(M2)もチョーサーの事例を反例にもつことになるはずだ。「チョーサー」の言語実践に参加を表明する際に、チョーサーの死後の消費者による捏造に大半が由来する記述を利用していたとするならば、彼らは「チョーサー」の生産者と同じ言語実践に参加し損ねていたことになるのである。

だが、捏造時代の消費者は実際に「チョーサー」の生産者と同じ言語実践に参加し損ねていたのではないか。ディッキーに反対してこのように言うべき理由があるように、私には思われる。ディッキーがチョーサーの事例を(D1)への(そして、(M2)への)反例と考えるのは、「普通の話者の直観が非難の声を上げる」ことによる¹⁴。しかし、私はこの「非難の声」を信頼すべきでないと考える。

チョーサーの事例を先の母娘の事例と比較してみよう。「アヤ」の指示対象が通時的に変化して母を指示するようになった頃の消費者を考えたい。彼らは母の隠した恐るべき事実を知らず、指示対象の変化も知らないとする。その場合、「アヤ」の言語実践が辿った歴史について、彼らを証人とするわけにはいかない。消費者は、彼らが「アヤ」の言語実践に参加する以前から「アヤ」の指示対象は変わらないと考えるだろう。しかし、その考えは正しくないのである。他方で、チョーサーの事例について、もし捏造時代の消費者に対して「あなた方の言う「チョーサー」は歴史上のチョーサー本人のことを指しているか？」と尋ねれば、おそらく彼らは肯定するだろう。捏造があったことを彼らが知らないというのは非常にありそうなことである。その無知ゆえに、彼らが「チョーサー」で歴史上のチョーサー本人を指示できていると考えるのだとすれば、「アヤ」の消費者の場合と同様にして、捏造時代の消費者が指示対象について正しい意見を持つことを疑うべきではないだろうか。

それでは、現代の「チョーサー」の消費者が持つ言語的直観ならば、ディッキーの反論を支持する決め手として利用できるだろうか。「チョーサー」の言語実践が特徴的なのは、捏造時代の最後に捏造に由来する記述が一掃されたことである。このことに関連した重要なことは、現代に共有された「チョーサー」の記述内容が、捏造時代の消費者からの情報にほとんど由来しないことである。その記述内容は、歴史研究の手法に則りつつチョーサーの同時代かその後書かれた文献を通じて(あたかも「チョーサー」の生産者から直接的に)得たものである。だから、現代の消費者は「チョーサー」の生産者と同じ言語実践に参加できるという考えは、文献を通じた生産者からの情報経路の存在に

よってその正しさが保証されている。そして現代の話者は、ディッキーの思い描く通りの直観によって、捏造時代においても「チョーサー」が歴史上のチョーサー本人を指していたと考えるかもしれない。だが、いま確認したように、情報経路が捏造時代をスキップして直接的に生産者と現代の消費者を結んでいることを考慮するならば、現代の消費者であるわれわれ自身について成り立つことが、捏造時代の消費者についても成り立っていたはずだと推断するわけにはいかない。すなわち、現代の消費者が生産者と同じ固有名使用実践に参加できるというだけで、現代の消費者にとっての時間的な先行者である捏造時代の消費者もまたその言語実践に参加していたとは言い切れない。チョーサーの事例は (M2) の反例と見なされるべきではなく、むしろ、現在の消費者が生産者と同じ固有名使用実践に参加できていることを根拠にして、過去の消費者にも同様のことが成立していたはずだと推断できないことを示していると言えないだろうか。そうすると、捏造時代の消費者の直観だけでなく現代の話者が持つ直観もまた、議論のデータにするほどの信頼性がないことになる。よって、捏造時代の消費者が「チョーサー」の生産者と同じ言語実践に参加し損ねていたという (M2) の予測の正しさを否定するために、ディッキーのように普通の話者の直観に頼ることはできない。

本節では、エヴァンズの再解釈を通じてディッキーの (D1) を (M2) に修正し、チョーサーの事例を (M2) に対する反例として扱うディッキーの見解を批判した。(M2) は、ディッキーの批判にもかかわらず保持されると考えられる。

6. 消費者の永続的服従

本節では、ディッキーが十分に扱っていないにもかかわらず、エヴァンズの考えを理解する上では欠かせない議論を拾い上げたい。

エヴァンズによると、消費者は「服従 (deference)」という特徴で生産者から区別される。第2節で述べたが、固有名使用実践を特定する際に利用する記述の内容が正しいかどうかを決定するのは生産者である。消費者が生産者と同じ

固有名使用実践に参加する時、彼は生産者が持つこの權威性を了解していなければならない。したがって、「 α 」の言語実践を特定する記述と指示対象に関する事実との間に食い違いがあることが明らかになった場合、消費者は記述内容の誤りを認め、これを修正する必要がある。

いまの論点を鮮明にする目的で、ここに「派生的言語実践 (the secondary practice)」という概念を導入しよう¹⁵。指示対象が死んでしまった「チョーサー」のように、指示対象からの新しい情報がなにも付け加わらない時期における固有名の言語実践では、定まった情報が広く消費者同士で共有されるようになる。たとえば「ホメロス」といえば、彼を知っている現代人はまず『オデュッセイア』と『イリアス』を後世に遺した古代ギリシャの詩人」と言うだろう。ホメロスがすでに死んで、その言語実践に新しい情報が何も入らないこの時期に入ってもなお、「ホメロス」を使用して何かを述べることへの関心が失われないのはなぜだろうか。この問いに答えるために、派生的言語実践の概念が導入される。指示対象が亡くなってからも固有名使用実践が止まないのは、エヴァンズによると、名に関する通念と化した記述を約定的に用いることで、新しい情報を伝達しあうことが可能となるからだ。これを「ロビン・フッド (Robin Hood. 以下, RH と省略する.)」を例にとって説明しよう。われわれが知っている RH といえば、「シャーウッドの森に住んでいた義賊」(便宜的に、この記述を「the ψ 」とおく)であろう。RH に関する良く知られた事柄を確認し合うだけでは、RH に関して語ることの興味が失われて、RH の言語実践は消滅していく。だが、RH の通念は、RH を使って何か新しいことを述べることに利用できる。たとえば誰かが「RH のような正義漢でありたい」などと自分の志を伝えるとき、彼は新しい情報を RH の言語実践に付加している。この時彼は、性質 (ψ) があてはまる人物をそれが誰であれともかく指示しているつもりで RH を用いているのである。

とはいえ、記述内容の真理性に関して、派生的言語実践を営む消費者たちが生産者の權威への服従から解放されたわけではない。かりに、われわれによる RH の使用が、その生産者に由来しており、しかも生産者が指示した人物に

について、現在「the ψ」と誤って考えられているとする。(実際に「RH」と呼ばれた人物が当時存在していたが、彼の生涯は、伝説に語られたこととほとんど何の関係もなかったようである。)われわれの通念に誤りがあることが発覚したとき、われわれが誤りを認めるやり方には次のふたつがある。ひとつは、われわれの通念、すなわち RH の言語実践を特定するのに使用している記述内容を修正することである。もう一つは、「the ψ」の誤りを見つけた消費者が「RH はこれまで知られていたのとは別人であった」と考えて、記述内容に適合する指示対象を新しく決めることである。消費者はどちらを選ぶことになるだろうか。まず次のことが認められる。消費者が生産者と同じ RH の言語実践に参加するならば、消費者は生産者と同じ対象を指示して RH を使っている。このことからさらに次が出てくる。生産者と同じ RH の言語実践に参加し、その一方で記述内容の誤りを見つけた場合に、消費者がその記述内容を満たす指示対象を新たに決めることはできない。記述内容を保持して指示対象を変えろという選択は、生産者と同じ RH の言語実践に参加する限り許されないのである。かくして、消費者が生産者と同じ RH の言語実践に参加するとき、記述内容に誤りが見つかったならば、消費者はその記述内容の方を修正しなければならない。以上から、消費者の「服従」という特徴が一般的な仕方で述べられる。「人物の固有名といった種類の表現に対するこうした一般的理解は、われわれ[消費者]を永続的な服従(permanent deference) (すなわち、われわれが用いる名が指す人物について、われわれ自身に持ち合わせのない情報に[いつまでも]可感的(sensitive)¹⁶であること)に置き続ける。(Evans, 1982: 196) ([]内は執筆者による挿入)」

ここまでの解釈をまとめると、固有名を使って指示を行う際に満たす必要がある条件は以下である。

- (M1) 話者は名を用いる際に、一般に通用している情報を参照しながら、どの言語実践に参加しようとしているかという意図を表明しなければならない。

- (M2) 生産者と同じ固有名の言語実践に参加するとき、参加を表明する際に利用する記述の大半が生産者に由来する情報に基づいていなければならない。
- (M3) 指示対象に関する新しい情報に臨んで、すでに通用している情報に誤りが見つかれば、消費者は彼についての理解を修正する用意がなければならない。

いかにして消費者が生産者と同じ固有名使用実践に参加するのかについて、エヴァンズが考えたのは以上の三つの条件であることになる。

ここでディッキーの解釈についての私の批判をまとめておく。彼女が因果・歴史的描像に記述的要素を組み込む複合説 (hybrid theory) 的見解においてエヴァンズを解釈したことは、第2節で私が立てた解釈の見通しと一致する。だが、チョーサーの事例に対する詳細な検討をしないままに、これをエヴァンズの因果性条件への反例として扱った点でディッキーは正しくない。さらに、(D2) を条件に加えてしまえば、エヴァンズの立場が一貫しないものになってしまう。

7. 言語実践の誤同定、対象の誤同定、種類の錯誤

本節では、固有名使用実践に参加し損ねることに結びつきうる誤りについて考察する。この考察のひとつの目的は、エヴァンズ自身の議論にはないある区別を明るみに出すことである。そのもうひとつの目的は、固有名の指示に関わる様々な現象をここまでの解釈で得た三つの条件によってどこまで扱えるかを検討することである。Evans(1982)の固有名論は、実際には人物名のみを説明のターゲットにして考察されている。エヴァンズが固有名一般の理論を目指していたことは確かだが、人物名に限られた考察を固有名全般に関する見解へと直ちに一般化できるとは限らない。本節後半では、固有名一般へとエヴァンズの理論を拡張した場合に待ち受けている問題の一つを取り上げ、その解決がどのように為されるべきかについて見通しを述べる。

参加の失敗へと結びつきうる誤りの一部は、以下の三つの文例で表現される。

- (1) あなたが言っているのは、あのハナコじゃなくて、そっちのハナコか。
- (2) ハナコって、あの人じゃなくて、その人だったのか。
- (3) ハナコって、人じゃなくて犬だったのか。

これらの表現は固有名「ハナコ」¹⁷でどの対象を指しているかを特定しようとする際に犯す誤りを表現しているが、それぞれが互いに異なった誤り方をしていると考えられる。これらはどういった特徴をもつのだろうか。そして、これらの誤りはすべて前節までで解釈したエヴァンズの議論のうちで扱うるものなのだろうか。

(1)から読み取れることは、「ハナコ」と呼ばれる人物がふたりいることが話者の了解のうちにあるということである。そして、その紛らわしさのゆえに、ふたりのハナコのうちのどちらについて話しているのかが誤解されたのである。エヴァンズの表現でこれを言い直せば、(1)が表現しているのは、固有名「ハナコ」を使う複数の言語実践の中から、話者がひとつを特定できなかったことである。(2)もまた、「ハナコ」で指している対象を取り違えるタイプの誤りではあるが、こちらでは「ハナコ」に参与している言語実践はひとつだけであると考えられる。以下では両者のこうした違いを捉えて、前者を「言語実践の誤同定」と呼び、後者を「対象の誤同定」と呼ぶことにする。

言語実践の誤同定は、(M1)に関わる誤りである。この誤りを犯すことの原因はいくつかあるだろうが、その一つが次のようなものである。話者は複数の固有名使用実践が共有する記述内容だけに言及することによって参加の意図を表明する。これによって彼女は、話題となっている対象が何なのかについて聞き手に誤解されるのである。

他方で、対象の誤同定はひとつの固有名使用実践において対象を取り違える場合である。この取り違えは、一般に次の状況を指す。

生産者は α を指示する言語実践に参加している

話者は、この生産者と同じ言語実践に参加しているつもりで α' を指示する

われわれは、生産者と同じ対象を指示することなしに消費者が生産者と同じ固有名使用実践に参加していると言うことができない。 α' を指示するこの話者は、実際には生産者と同じ固有名使用実践に参加し損ねているのである。具体的な説明のために、瓜二つの母娘の例を再び用いる。「アヤ」の指示対象が娘に固定された固有名使用実践において、ある生産者Sが娘にそっくりの母を指して「アヤ」を用いた場合、Sはこの固有名使用実践に参加し損ねる。つまり、次のような状況である。

生産者は集団で娘を指示する固有名使用実践Pに参加している

Sは、Pに参加しているつもりで、母を指示する

生産者が対象を指示する際にも、すでに確立した固有名使用実践を利用する。したがって、Sも他の生産者が指示する対象を指示しなければ、「アヤ」の固有名使用実践に参加するとは言えない¹⁸。以上のように固有名の使用の誤りを言語実践の誤同定と対象の誤同定の二種類に区別してこれを明晰化しうことはエヴァンズの立場によってはじめて可能になることであり、彼の議論がもつ利点であると言えよう。

最後に、(3)で表現される誤りを考察して、エヴァンズの議論を固有名一般へと応用した際に直面する理論的課題を提示したい。その上で、この課題をいかにすれば解決できるかの見通しを、おぼろげな形でではあるが述べたい。

(3)「ハナコって、人じゃなくて犬だったのか」が表現しているのは、対象の種類に関する誤りである。これを以下では「種類の錯誤」と呼ぼう。対象の誤同定の場合と同様にして、種類の錯誤を犯すとき、消費者はかならず意図した固有名使用実践に参加し損ねることになるのだろうか。この点から確認しよ

う。

種類の錯誤によって、いつでも対象の誤同定を犯すことになるわけではないことは確かである。たとえば、T氏の飼っている一匹のペットが「ハナコ」という名のチワワであるとする。これがかりに愛らしさで評判のペットだとして、広く「ハナコ」の消費者の間で共有されている情報が「T氏が飼っている猫」であるとする。種類に関して誤りがあるにもかかわらず、この情報で「ハナコ」の言語実践を特定することは必ずしも対象の誤同定を結果しない。なぜなら、想定状況における「ハナコ」の消費者は、あくまでもT氏の飼っている唯一のペットのことを話していると考えてよいからである。すなわち、消費者の間で共有された情報がたとえ種類の錯誤を含んでいても、その誤りはあくまでもひとつに特定されている対象についての誤りであると考えてよいのである。この例は、種類の錯誤を犯しているにもかかわらず、消費者が生産者と同じ固有名の言語実践に参加できることを示している。

そこで今度は逆に、種類の錯誤が一般に消費者の固有名使用実践への参加にとって何の影響も持たないかどうか、と問うてみよう。たしかに、犬を猫と間違える程度の錯誤では消費者の参加にとって問題とはならないかもしれない。しかし、極端な錯誤の場合、われわれの直観が揺らぐ。たとえば、人物名をサッカーチーム名と誤解する場合¹⁹、人物名を建築物名と誤解する場合などがそうした場合に含まれるだろう。こういう場合には、消費者が生産者と同じ対象を指して固有名を用いているとは非常に言いづらい。そうすると、たとえ(M1)～(M3)をすべて満たしても、消費者が生産者と同じ言語実践に参加しているとは言えないことにならないだろうか。この点について、以下で詳しく検討していこう。

まず、極端な種類の錯誤が(M1)～(M3)を満たす状況で生じるかどうかについて、サッカー選手の名前「A」をサッカーチーム名と誤解する場合を例にとって考えてみたい。話者Uは「A」の生産者からの伝聞を介して、「A」の言語実践に導入される(M2)。また、Uは通用している情報に誤りが見つければ、これを修正する用意がある(M3)。そして、問題はこの状況で(M1)が満たされ

るかどうかである。種類の錯誤を犯すことで、Uは生産者に対してどの固有名使用実践に参加するつもりなのかを表明することができなくなっているのではない。だが、必ずしもそうはならない。注目したいのは、サッカー選手に当てはまる記述の多くがサッカーチームにも当てはまることだ。いくつか挙げると、「人気がある」「調子がいい」「無名/有名である」「競り合いで力を発揮する」等である。異なる種類の対象であっても、述定可能な記述を多く共有することで、聞き手が対象の種類を勘違いする可能性が生じる。「Aは最近調子が良くて、人気がある」などといった、「A」の言語実践に参加する者であれば誰もが共有している記述を聞いて、Uは「A」がサッカーチームのことだと誤った推測をしてしまう。Uは一般に通用している情報を参照しながら「A」の言語実践に参加する意図を表明するにもかかわらず、「A」について種類の錯誤を犯すのである。

ここで、ある区別にわれわれの注意を向けておきたい。

- ① 消費者が固有名使用実践に参加すること
- ② 彼がそれに参加する意図を表明し、これが適切に理解されること

②が実現することとはまさに(M1)が満たされることである。しかし、②の実現は①の実現までを保証してくれるものではない。極端な種類の錯誤が示しているのは①と②をこのように区別すべきことであるように思われる。この点を明確化するために、さらに次の想像をしよう。話者Vは、飛行機パイロットたちのちょっとした会話に加わった。その内の一人が次の発話をする。「出雲が今度引退するらしい。長らく長距離輸送のエースとして活躍したのに、惜しいことだ。時代の変化を思わせるね。」パイロットたちが夜行列車「出雲」にたびたび乗車する鉄道マニアだったことをVが知らず、彼は「出雲」を飛行機パイロットの名前と勘違いする。後にVは別の人たちに、「出雲」のエピソードを種類の錯誤を犯したままに伝える。Vの周囲の人々の中にはこのエピソードに感化されるものが現れて、彼は「自分も出雲さんのように、機械の歴史

と共に歳を重ねて、慕われつつ一線から身を引くような生き方がしたい」などといった話をする。たとえばまた、折に触れてVと仲間たちは、「君は出雲を目標にしているではないか」とその人を励ましたりする。われわれはこの例に対して、消費者たちがパイロットたちと同じく夜行列車を指示して「出雲」を用いているとは考えないだろう。

この状況は、(M1)を満たしていないからこそ生じるのだと言いたくなるかもしれない。つまり、極端な種類の錯誤も(M1)で扱いうるというのである。だが、そのように考えることはできない。少し想像を膨らませてみよう。最初の会話のパイロットたちとVが再び会話する機会があるとする。彼らはVに「君の言う引退した出雲って、電車ではないのか？」と問い、Vは「そうではない、エースパイロットのことだ」と答える。この会話は、Vがパイロットたちの「出雲」の言語実践に参加し損ねていることを示している。では、この会話はVが(M1)を満たさないこと、すなわち、Vが「出雲」の言語実践に参加する意図を表明し損ねたことを示しているだろうか。示していない、と言うべきである。というのも、パイロットたちは、Vが「出雲」という名のエースパイロットについての別の言語実践に参加しようとしているのだとは考えずに、まさに「出雲」という電車についての彼らの言語実践に参加しようとして、まちがえてしまったのだと考えているからである。そうでなければ、Vの発言を「勘違い」とはみなさないだろう。Vの発言がまったく別の話ではなく、勘違いであるとされるためには、Vがパイロットたちの言語実践に参加しようとする意図しているということは、パイロットたちにも伝わっているものでなければならない。すなわち、Vは(M1)を満たしているのである。

これはひとまず次の状況と同じである。すなわち、ある消費者が「ハナコ」の生産者たちの言語実践を「T氏の飼っているペット」という記述で特定しながら、さらに「ハナコは猫である」と誤って述べる状況である。この消費者は種類の錯誤を犯しながらも、生産者たちの「ハナコ」の言語実践に参加する意図を表明できる。だが「ハナコ」と「出雲」の状況は、対象を指示することに失敗しているかどうかという点で異なる。「ハナコ」の場合では、消費者

がハナコを指示できていないと考えなくてもよい。一方で「出雲」の場合、Vは「出雲」によってもはや何ものも指示していない。「出雲」というエースパイロットは、錯誤が生み出してしまった架空の存在でしかない。生産者の固有名使用実践を特定し、これによって生産者に参加の意図を表明することができるときにも、極端な種類の錯誤は、固有名を使って生産者と同じ対象を指示することに失敗する状況をもたらさるのである。

したがって、消費者が固有名使用実践に参加する意図を表明し、これが適切に理解されること(②)は、消費者の固有名使用実践への参加(①)を保証しない。だから、(M1)～(M3)を条件とする限りで、生産者と同じ固有名使用実践への参加に成功することが、生産者と同じ対象を指示することの成功まで保証しない。図式化すると次のようになる。ある消費者は、ある対象について、生産者たちの言語実践ではP1とP2が信じられていると考えているとする。P1は実際に生産者たちが信じていることであるが、P2は消費者の誤解であり、生産者たちはP2を信じてはいないとする。そのとき、P1をもとにこの消費者が生産者の言語実践を特定することに成功するのだが、P2の誤りのゆえに、生産者と同じ対象を指示することには失敗するという事態が起こりうることになる。そして、P2について極端な種類の錯誤に関わる信念を持つのが、Vの状況なのである²⁰。

極端な種類の錯誤を犯した消費者が、生産者と同じ固有名使用実践に参加できないのはなぜだろうか。私自身、答えの決め手を欠いているものの、本稿の考察の締めくくりとして、説明にむけた二つの選択肢を挙げたい。

ひとつの可能性は、対象の種類に関する知識を持つことを固有名使用実践への参加条件に加えることである。パイロットたちと同じ「出雲」の言語実践に参加するためには、「夜行列車である」といった種類に関係する記述を「出雲」に結び付けておく必要がある。これは第4節で言及した「当てはまり程度」にもう一度光を当てることにもつながる。そして、この可能性を追求することは、一度はEvans(1982)の論述と整合しないという理由から棄却した(D2)を復活させることにもなりうる。とはいえ、われわれがこの可能性を追求すること

は、エヴァンズが記述に与えた役割を修正することにもつながる。彼の考えを繰り返すと、固有名使用実践の特定に利用される記述は、その内容が指示対象に当てはまることを要求されない。ところが対象の種類に関する知識を固有名使用実践の参加者に課すことは、種類に関する記述内容だけをその例外にしてしまい、彼の記述に与えた性格を不徹底なものにするのである。このようにして、たしかにエヴァンズの考えに反するものの、この答え方の良い点は、それがおそらく多くの人の直観に沿うものであるということだ。

その一方で、エヴァンズの記述に対する見方に反対せずに問題を扱う可能性はあるだろうか。極めて心もとない見通ししかないものの、以下では固有名との関わりで記述が演じる役割の多様性に注目し、その可能性を探ってみたい。第6節で、記述が約定的に用いられる派生的言語実践について論じた。われわれはすでにそこで、固有名使用実践を特定することとは別に記述が役割を持つことを見た。とはいえ固有名の指示対象が存在しなくなった後に限らず、固有名との関わりにおいて記述はさまざまな役割を果たしている。たとえば、記述の内容から指示対象についての仮定や推測を導くことがある。あるいは、問題となっている固有名の指示対象が他の対象との間にもつ関係が、その記述から把握される。あるいは、指示対象を世界の中から探し出す際の手掛かりとされる。固有名を使った会話や思考の多くの場面で、記述は多様な仕方を利用される。言い換えると、様々な目的で固有名が用いられることに呼応して、固有名に結び付けられた記述も様々な用いられ方をするのである。

Vが陥った状況にひとつの観点を与えるために、記述の多様な用途に着目して彼の状況を記述してみよう。「出雲」の種類として「夜行列車である」という記述を結びつける場合と、「パイロットである」という記述を結びつける場合とでは、「出雲」を含む推測や推論が大きく異なるだろうし、指示対象を世界の中から探し出す際に利用する情報も異なってくるはずである。そして、Vの仮定や推論が指示対象について正しいことはほとんどないだろうし、また彼は決して指示対象を探し出すことができないだろう。Vと消費者たちによって諸々の記述が結びつけられる対象（「出雲さん」なる人物）は、実

際にはどこにもいないのである。

本節で私は、このような状況が (M1) ~ (M3) を満たしながら起こりうることを論じた。ここまでの議論が正しいとして、エヴァンズの立場に整合するような解決とは何だろうか。たった今われわれは、固有名使用に関わる記述の役割が、参加の意図を表明することに限らない多様さをもつことに注目した。そこで、この事実に応じて記述の役割に関わる条件を (M1) の他にさらに増やすことで、極端な種類の錯誤を理論から除外できるかもしれない。しかもそうした条件はすべて、固有名を使った伝達において記述が担う役割に言及しても、その記述が具体的にどのような内容を持つかに関して踏み込んで言及するものではない。この種の条件の具体例として、すでに (M1) が与えられている。固有名の使用に際して記述が果たすべき役割を、(M1) は「特定の固有名使用実践へ参加する意図を表明すること」と定めるが、記述の内容が何であるかをこの条件は規定しない。そうした手立てによって、記述に関する条件が種類に触れることなしに (間接的に) 極端な種類の錯誤を犯す可能性を排除するのである。

極端な種類の錯誤を犯した消費者が生産者と同じ固有名使用実践に参加できないことの説明としてここに挙げた二つの選択肢のうち、いずれの可能性を本格的に追及すべきかについては、今後の考察にゆだねることにしたい²¹。

註

1 この連言を十分条件にとった場合、マダガスカルの事例として知られる反例が存在する。(Evans(1985a), および Kripke(1980) p.163) 『名指しと必然性』において、クリプキは因果的描像を満足な理論としてよりも、記述説に替わる理論を提示するためのよりよい見取り図として提示すると述べている。また、本稿ではクリプキの議論を論点化するつもりはないので、本文では必要条件のみの形で提示した。

2 ここで与えた生産者・消費者の区別では扱いにくい事例が確かに存在する。たとえば、テレビで見ているが対面したことのない対象について、私とその固有名「 α 」の生産者であるかどうかと問うる。こうした問題は、生産者の定義項に含まれる「指

示対象を実際に知覚する」という表現の適用をどの範囲に設定すればいいかがそもそも不明瞭なために生じる。これは「知覚」概念と共に持ち込まれる問題なのである。テレビ、ラジオ等の遠隔的な情報手段を介して「 α 」の生産者になれるかどうかは、様々な状況においてそれらの情報手段が信頼可能かどうかにかかっている。一般に、テレビやラジオから得た情報に基づいて「 α 」に関して持った信念が概ね正しいと考えられないならば、「 α 」の指示対象について何が真実であるかを決定できるとも考えられないことになり、私は「 α 」の生産者になれない。

さらに、いま考察している状況で、われわれがテレビの向こうの「 α 」と言語行為を行う機会は皆無といってよい。そのため、私が「 α 」の生産者であると主張したいときには、生産者の定義を修正する必要がある。ありそうなことだが、「もしその対象が人物であれば、その人とさまざまな言語行為を行う機会がある」という生産者の条件は、より一般的に見た場合でさえ強すぎるかもしれない。この点の考察は他稿にゆずる。

3 Dickie(2011)を参照。

4 ディッキーは証拠として、エヴァンズの次の箇所を引用している(同上 p.6)。

“... it is reasonable to attribute to a speaker the intention to participate, by his use of a name, in the same practice as was being participated in by those speakers from whose use of the name the information he has associated with the name derives.” (Evans, 1982: 387)

5 これ以上立ち入って議論しないが、ここでの情報、信念、判断の関係づけは、エヴァンズの議論に準ずる。Evans(1982) Ch.5 及び Ch.7を参照。

6 Evans(1985a), p.13を参照。

7 Dickie(同上), p.7を参照。

8 エヴァンズを批判したのと同じ論文においてディッキーは、生産者・消費者、情報、ファイルといったエヴァンズの見解を構成する概念を元手にして“Governance View”と呼ぶ独自の理論を立てた。そこでは(D2)が却下され、(D1)はチョーサーの事例を抜くような改変を蒙る。ディッキーは、「 α 」ファイルが過去・現在・未来の「 α 」についての語りを統制する一定のルールや構造をもつと主張し、こうしたルールや構造が話者から話者へと伝達されるとした。詳細は Dickie(2011)を参照。

9 情報の提示が網羅的である必要はもちろんなく、その場で固有名使用実践が特定できるのに十分な範囲の情報に訴えるだけでよい。

10 こうした考えは Campbell(2002), p.38 にもみられる。

11 では、Evans(1985)においてエヴァンズが「当てはまりの程度」を提案した目的は何だったのか。当てはまりの程度は、クリプキの提案に修正を加えようという文脈で出された因果的描像のための修正案である(第3節)。その文脈でエヴァンズは、固有名の指示にとって必要とされる因果関係が、クリプキの提案するように対象への命名儀式と話者の間にあるのではないと議論する(この論点は Evans(1982)の固有名論に引き継がれる)。固有名の指示が必ずしも命名された対象に固定し続けないことを、エヴァンズは第3節で紹介したアニールの例によって示そうとする。情報の歪みや他の対象からの情報の混入が過度になると、固有名を使って話者が命名された対象を指示できなくなってしまうかもしれない。こうした例の観察を通して促されるのは、むしろ指示と関係する因果関係が対象の状態や行動と話者の間にあるという考えである。因果関係の在り処を適切に修正すれば、アニールの例のような指示の失敗も扱えるようになるだろう。要するに、ここで彼の議論の主眼は自説の追求にあるのではなく、因果的描像にとって不利に映る事例からこれを救い出してやることである。当てはまりの程度の提案は暫定的であり、事実、これ以降でエヴァンズがこのアイデアを表立って吟味することはなかった。

12 Evans(1982), pp.387-91 及び、Evans(1985a), p.17 を参照。

13 「消費者が固有名の言語実践に参加するとき、生産者が指示を固定したのと同じ対象を消費者も指示している」という表現は、第6節でも別の論点で利用される。第3節において私は、この表現がエヴァンズの理論の基本的な図式を示すものであると述べた。本論で現在取り扱っているエヴァンズの課題、すなわち固有名使用実践が生産者から消費者へと伝播する仕組みに与えた彼の説明は、この図式の下で理解されるべきであることを強調しておきたい。

14 Dickie (2011), p.7 を参照。

15 Evans (1982), pp.394-6 を参照。

16 情報の内容は非概念的である(第3節)。これに対して記述の内容はもちろん概

念的である。主体がそうした記述的内容を思考する際には、彼の経験に応じてその思考が真となったり偽となったりすると考えられる。そして、思考が真理値を持ちうるのは、その思考が現実の対象についての思考である時に限られるとも考えられる。(ちなみにエヴァンズはフレーゲを解釈する際にも、彼の「思想(考) *Gedanke*」をこの考え方に沿う仕方を読む。Evans(1982) Ch.1 及び Evans(1985b)を参照。)エヴァンズによると、ここで対象と思考を結ぶ役割を担うのが情報である。思考が対象についての思考でありえるのは、その対象からもたらされる情報に対して思考が可感的である時のみである。すなわち、それは、その対象からもたらされる情報に応じて思考が真になったり偽になったりできる時のみである。しかし、この考えには問題があるとしばしば指摘されてきた。思考という概念的なものがいかにして情報という非概念的なものに対して可感的でありうるのか? エヴァンズはこのことを説明していないし、それどころか、彼の説ではこれがどうしても説明できないのではないか? この論点については、McDowell (1994) を主要な引き金とする大論争が起きている。

17 正確さを期すのであれば「固有名「ハナコ」と書くべきではなく、「ハナコ」という綴り」や「は—な—こ」という音の並び」などのように表記すべきであろう。

18 Evans(1982), p.377 f.5 を参照。

19 Dickie (2011) を参照。

20 エヴァンズがこうした反論を想定して (M1) に変更を加えることはなかった。彼がそうした変更を加えなかった証拠は、たとえば彼の次のような論述に求めることができる。“It is quite easy to see how *all* the information in possession of a *consumer* may be false of the referent of the name. (Evans, 1982: 385) (イタリックは著者)” “But it is clear that wholly baseless information can end up associated with a name in the minds of consumers, without any such disturbance to the practice of calling an individual by that name.(同上)” また、Evans(1982) p.403 pl.2 にも同様の記述がみられる。

21 本稿の執筆に当たり、予稿の段階で飯田隆氏、野矢茂樹氏、古荘真敬氏からコメントを頂いた。特に野矢氏からは、全体から細部に渡って数多くのご批判とご助言を頂いた。記して感謝したい。

文献

- Bach, K. (2006). 'What Does it Take to Refer?'. In E. Lepore and B. C. Smith (eds.) *The Oxford Handbook of Philosophy of Language*, Oxford: Oxford University Press: 516–554.
- Braun, D. (2006). 'Names and Natural Kind Terms'. In E. Lepore and B. C. Smith (eds.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Language*, Oxford: Oxford University Press: 490–515.
- Campbell, J. (2002). *Reference and Consciousness*, Oxford: Oxford University Press.
- Donnellan, K. S. (1966). 'Reference and Definite Descriptions'. In *The Philosophical Review* 75: 281–304.
- . (1970). 'Proper Names and Identifying Description'. In *Synthese* 21: 335–358.
- Dickie, I. (2011). 'How Proper Names Refer'. http://www.academia.edu/195354/How_Proper_Names_Refer_final_version_ (2012 年 10 月 8 日), (*Proceedings of the Aristotelian Society*, 111: 43–78)
- Evans, G. (1982). *The Varieties of Reference*, John McDowell (ed.), New York: Oxford University Press.
- . (1985a). 'The Causal Theories of Names'. In his *Collected Papers*, Oxford: Oxford University Press, 1–24.
- . (1985b). 'Understanding Demonstratives'. In his *Collected Papers*, Oxford: Oxford University Press, 291–321.
- Kripke, S. (1980). *Naming and Necessity*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 松坂陽一 (二〇〇九)「指示と意図」(『岩波講座哲学 03 言語／思考の哲学』東京, 岩波書店) 十五—四二頁.
- McDowell, J. (1994). *Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Reimer, M. 'Reference'. *Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2009 Edition)*, (2012 年 10 月 25 日).
- Strawson, P. F. (1959). *Individuals*. London: Methuen.

- . (1971). 'Identifying Reference and Truth-Values'. In *Logico-Linguistic Papers*, London: Methuen, 75–95.